



特
へは
2937
3

春色戀廻深分解卷之下

江戸

朧月亭有人作



第五回

流石磐石の柳川巻も子刺さておの淋しく針を
按磨のその外ハ岸うら水の春をうある船宿の二
階ゆめのとあめやうふ海ら入ハ胡人あゝどる者と小方
角岬も理よおちて跡よ墨者ハ何とや望み海ぬ一
あやつふお替りてくえんれバ一何ぞかままんハさつた

うら 舞のて 斗りか 止るあまが ぞうろ ちのえ 正ト 高名の
教と 聖く せうめい くと 是れ なる 一 ぞうも ちやう ちねん 正
いらぐそちこち 丑 体ごらう あり 肉いらう 万 一 六多 湯
舞早 さんぐ 気 成きう 七 年 中 由里 ぶらう 津又 赤
松 ぼし あり ぶらう と なく 成 掛 七 年 ぶらう 松の方
いらが おま せん ぐ 悪く あり ません 一 雁 月 の 鏡 ぶらう
きの 人 おま せん ぐ 悪く あり ません 一 雁 月 の 鏡 ぶらう
あつう ちねん ぐ 一 退 聖 正 の 己 七 悔 くと 屋 万 の 為 清 の

か 室 中 由 来 する の う ち 形 子 又 あり あり 悔 らう 正 一 座 寺
せん ち 一 成 あり なる 正 刻 由 聖 又 悔 らう 清 くと 果 正
いら の ぬ ぬ くと ち ま づ 七 一 退 聖 正 七 年 ぶらう あり ません 夕
か 形 せん ぐ いら 善 物 せ ち ち 正 の 善 成 七 年 ぶらう あり ません 夕
之 世 相 成 俗 又 ち づ くと 正 七 年 ぶらう あり ません 夕
身 分 後 づ くと あり ません 七 年 ぶらう あり ません 夕
是 七 年 ぶらう あり ません 七 年 ぶらう あり ません 夕
あ いらう ち 屋 万 の 為 清 の 己 七 悔 くと 屋 万 の 為 清 の

あのおおもん物種一あぞおぐ津山お股な一まぢ
さう仕中一お別来と附あ人あしためて叫があるとか
か物ぞ一今ハ夫先がりのうう止ませう 一まぢ
関ねトお種がりのい物種一とさうとてお人 一まぢ
一物も後とま中うふことぢやあせんけれども 一まぢ
をたまごうう一おく叫ねナ 一アノ子け種よおぢ大
さハだやうくおとあふつひ下もさぞお金さんハおぢ

うらう飛んてととあひあううう教とて下も津らあられ
あいまぢり今まのやうふりるあんぞいあまはまの
今日ううん残あうためるはのりてまはまのあまはま
おぢつうあんがお夏さんをさるふつひてもあまはまのあ
さんぐ津ぎんぐでたうう肉のあがる無ふ一とろく
いあとも利あのやうとてあまのあま一と大場の人をつら
あまさんぐ肉を卵よ一とあまぢやぢりしてあまがみま
あまふあまぢまぢらううあまぢあまおあまぢあま

時鳥
 如
 安
 其
 角
 下
 子



花雪

花雪
 下
 子



小万

下
 子

え 呂子さんなト又茶碗お酒をのどぐろとのむ 万「ラヤマ
体あの上様おまゐる子お茶をいんごうおまきまなお用
さんハあんまり海山あうらうと茶あの人あまません 一
どうせものやあまの「上様おようけ茶をともらぢや
お入り「どうもあまさんのおまぐらりのやうをいません
がどういふこぢやうかよあうらうお使いなをい「せん
あふ若芳あう世さうぐあやうお笑って呂子さんお別
別新う油ッてなることおい「てく「泣けるのよおまがわね

茶のつ下六

うう 冠母又安しらばありののひで云々がさうお初は
欲たうが来てあんべも品今つまはけい人かゆり泣きお
さう状さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
連なるく「油ッてなることおい「てく「泣けるのよおまがわね
やうともおんぜあださう茶碗あうけいお見目あなえいば
親がさういふことおまふくのが女の尻身まの尚ちよ
おま「けい「い「さ「い「やう「あ「た「人「心「し「様「よ「乳「母「の「お「や
肉く親里へる紙をやり教たうをい「てく「泣けるのよおまがわね

中うる何の中物あるあめめかまさん所の中うるあまた
 肉の女房おろすもあまやアあませんとらつくぞんを
 心も女房さん入らまらばけり城さびて由願ひませんが
 へんあいの私ゆふよまらあへんとおまさん人ひ
 笑ハせるのが何より想いのうたえ女房あれおま
 一生を捨ててさへあまをあけや何ゆゆらまらあせん
 一丈ぢや女房あまののらやあつ二人であらあく
 介使がこゝろとさうのいふ児まある女房心さへおの

つるごこの娘はあまの娘女を女房おれ
 おがつよのうへト浦島様つアレサおれぢやあません
 ヨおまさんハからあいのヨ「ぢやあから分らあ人ヨト
 万「ぢやいんばかりらとまぢや私が園りまきア子ト
 おらら一たん精トケココヨリ
 小万ハ居理又ささく〜と女房ハ悪癖ある男
 ぞとさししめらんあまど電別離者の情念を
 大智もあつと愚と後ト分別たちまちを

其のいんまのこの物をもは版を給くつちやま
使はるるまの我儘をてんやうふまをてんもの
いふまのうか漸め七あげやうに淋しくなふ氷
室があるうう少うたぐくま 氷室とのみの六が町
の突舟敷の向心賣の毛をのませうと者が大物ど
うまうまう一つけ今にハ物候一七居まのあう天窓の
用があのく性さう乳母さんと外で採んてをさう

いづか夫のいづかのおづかゆさのそりよのこサ又そんなことを
書るると痛ひふさるうう 珍儀でもよくかみき用
か漸とこうらやうとさうう 御まのうらて未候う
考まの世法まを病人のいふ一切を公人まうせふら
させざるまをふ着病あまううざれバキー由ふまを
いづかお早まをまやふあまをて二日以内の床の上
せんといふ後まをまのよるまをび大方をまをて下はま
町へゆきんて深敷をのふをむらと人ども海死あまの



夫の心はいつまでも
 懐くありまゝに今迄の忠告さん
 附分一二番お見つけ申す
 か方まゝにやま君のお心
 軍に於てお見つけ申す
 子ご様がお見つけ申す
 上へ先あきらつて
 夫の心はいつまでも

内務の料理の支度
 香波香湯さぬま
 又腕アがゆつても
 夫てお見つけ申す
 かねてお見つけ申す
 夫れよりお見つけ申す
 と身支度し病海
 歩歩も老々

つね玉川のきり紙さしてぞいのをだけは方ハお重と
出逢ひふ場の内より病り来るか重の病来よ
やそつるふ懸え入るねは小用あうとさかさまはと
かーとゆも居ば叔ハ使致をのどのあうぬし紙云
せせそのうそそふ死あやせん疾皆来よと
まはばお重の男女一曰ふ上と下と大らんざら
の泉あ重の井水濁くさぐせと疾さ入るば叔ハ
濁川人まがもーくとまより何方ふるまうそむふ

奈と下ナ

中るその附よか重ハいまど病あがり足も自在は運び
ゆむ揚間橋の中紐までゆんとせし附後より
入心ごふ伊の字とがぬたー提灯をぬぐ携へ
はふ人あひ来るのあまは是れとあどろた又ゆ人
ゆらんとせば是もまご提灯をぬぐふたづさ
あふぎくかけ来る人ハ目トく我と追来る者
トあひバ今ハ所体もこの橋上ふさまりていつん
せんまは此顛末二編の上の巻ふゆ

まゝの
編引つた
板仕の
上
高解
又編
と云

春色戀廻しゅんしよくらひの 深合解ふかあひげ 下之卷したのまき 終

